国内事例 in Japan 1

地域を愛する活動と脱炭素・生物多様性とのつながり／ホタルネットワークmito ホタル保全活動から「茨城セブンの森」へ

生き物観察を楽しみながら多くの子供達が活動に参加する。(提供：ホタルネットワークmito)

都心から電車で約1時間半の茨城県水戸市。水戸徳川家の庭園、偕楽園に隣接する千波湖周辺で、黄門様も愛でたホタルを守る活動が地域に根差して広がっている。

6人の園児から始まった保全活動

かつて豊かな水田に囲まれていた千波湖周辺は、時代とともに放棄水田が増え、宅地化が進みホタルも減少していった。昭和から続けられていたホタルを守る活動は、2005年からは保育園児6人を中心として結成された逆川こどもエコクラブが担っていく。その背景には、ホタルの最後の生息地となった常照寺周辺では十分な環境を確保できなくなり、ホタルを逆川緑地に移動することに決め、移動先の環境づくりを始めたことがきっかけにあった。

逆川緑地を子供達が除草すると湧き水が出てきて環境を整えていった。2006年、市の許可を受け、現在ホタルネットワークmitoの事務局を務める逆川こどもエコクラブや茨城環境管理協会（茨城県地球温暖化防止活動推進センター）など地域の専門家の支援の下、ホタルの卵と幼虫を逆川緑地に移植した。ホタルは無事新たな生息地に定着していく。

子供達は、作業の必要性を理解し、自ら鎌で除草し、畦を作り、泥をさらい、活動を運営する。学びを兼ねた活動が子供達を育んでいった。「子供達の成長を見るのが大人の楽しみ。ゲンジボタルが出てきたときの感動が広がることで、気づいたら3歳の保育園児から大学生にまで活動が広がってきた。」と事務局長の川島氏は語る。

活動は小中学生合わせて160人規模に拡大し、2013、14年と立て続けに環境省のこどもホタレンジャーとして表彰されることになった。

地域での活動の広がりとホタルネットワークmitoの形成

表彰をきっかけにホタルへの想いが地域に広がる。千波湖周辺で活動する3つの団体から、ホタルを再生したいとの声が上がった。単に観賞用にホタルを放流するのではなく、自然サイクルを確認し、維持していくことを各団体に理解してもらいたい。その力を見極め、2014年に逆川こどもエコクラブ、常磐大学、水戸市公園協会、水戸英宏小中学校の千波湖を四方で囲む4団体により、ホタルネットワークmitoが結成された。逆川こどもエコクラブはそれまでの経験を活かし、湿地の造成などで3団体をリードしていった。

広がる活動の中で、水戸英宏小中学校の「英宏の泉」では10トンもの不法投棄ごみを運び出しながら再生したという。

低炭素カップ・脱炭素チャレンジカップへの挑戦

地域での活動が発展するにつれ、社会の目を引いていった。中でも、脱炭素を実践する全国28団体がファイナリストとして出場する低炭素カップ（現、脱炭素チャレンジカップ。温暖化防止全国ネットとセブン-イレブン記念財団が共催、環境省と文部科学省が後援）には茨城県地球温暖化防止活動推進センターの後押しを得た茨城の企業、団体が2014年から積極的にエントリーしてきた。

すると、ホタルネットワークmitoから2015年の常磐大学を皮切りに3団体が次々にファイナリストとなって出場。2017年に水戸英宏小中学校が環境大臣賞を、2020年には逆川こどもエコクラブが愛知県の劇団シンデレラと組んで文部科学大臣賞を、2021年には再び水戸英宏小中学校が付属高校を巻き込み文部科学大臣賞を受賞するなど、華々しい成績を残していく。

同校は、2020年に環境省ローカルSDGs（地域循環共生圏）の実践地域団体として登録を済ませていることも見逃せない。

セブン-イレブン記念財団との協働、「茨城セブンの森」活動へ

活動は更に広がる。脱炭素杯をきっかけにセブン-イレブン記念財団と出会い、同財団との協働に発展する。2018年、水戸市の立ち合いの下、ホタルネットワークmito、セブン-イレブン記念財団、茨城県との間で10年間の協定が結ばれ、千波湖周辺の荒れた河畔林7haを再生する「茨城セブンの森」がスタートした。地域の子供、学生、市民に加え、時には100名を超える地域のセブン-イレブン店舗のオーナーや本部社員が活動に加わり、担い手が多様になっていく。

市民、行政、企業とのパートナーシップの広がり

このような脱炭素の成果が茨城県地球温暖化防止活動推進センターから発信されると、母体である茨城県環境管理協会の会員企業が次々に脱炭素杯のスポンサーになるなど、地元企業とのパートナーシップも実を結んでいく。

また、同協会は、地域循環共生圏実践地域にも登録する地元のJ2所属のフットボールクラブ、水戸ホーリーホックと協働し、スタジアム内でのエコ工作や温暖化防止アンケート、ペットボトル回収を毎試合実施し、子供から大人、市民から企業まで、地域すべてを巻き込んだ取り組みを広げている。

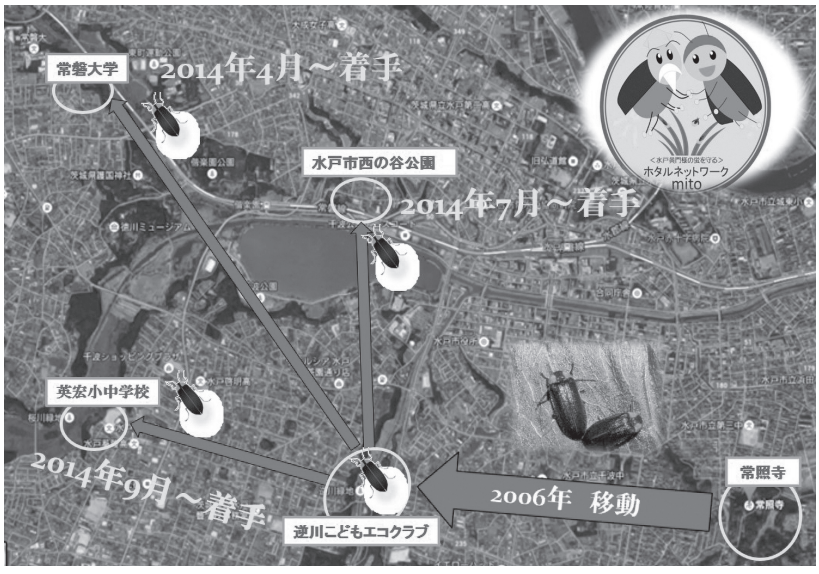
逆川こどもエコクラブを担っていた子供達は、認定講座を受講して中学生から大学生までの13人が地球温暖化防止活動推進員となり、ラムサール条約登録湿地である涸沼ツアーガイドに親子63名が登録されるなど、より専門性を備えた環境活動にも携わっている。

活動は地域の子どもたちが担う。（提供：ホタルネットワークmito）

活動の広がりの原動力は子供達の地域を守る強い気持ち、子供も大人も楽しく、誇りに感じる活動にある。地域の人たちが成長できる場を水戸では理想的に形成していった。黄門様のホタルを守るという地域の脱炭素、生物多様性の取り組みは、子供から大人まで参加し、市民、行政、企業のパートナーシップで未来の担い手を育て、地域を愛する活動となり、茨城の地に根づいている。

取材協力：ホタルネットワークmito事務局長 川島省二氏（一般社団法人 茨城県環境管理協会 環境事業部長 兼 公益総務担当部長 茨城県地球温暖化防止活動推進センター 副センター長）

千波湖周辺の活動地域



ホタルが生息地から移植され、千波湖の周辺に広がっている。（提供：ホタルネットワークmito）